

## ペテロ第二2章10-22節 「偽教師の滅び」

### 1A 権威の侮り 10-12

### 2A 愛餐に持ち込む欲望 13-17

### 3A 滅びの奴隷 18-22

#### 本文

ペテロの第二の手紙2章の後半、10 節からです。私たちは、ペテロが自分が天に召される、殉教するのが直前に迫っていることを知って、聖徒たちを奮い立たせる手紙を残しました。第一の手紙では、外部からの圧迫、迫害について、主にあって耐え忍び、喜びなさいと励ましましたが、第二の手紙では、偽教師が教会の中に入り込んでいることについて警告しています。そこで彼は、霊的な成長を励ましています。主によって何のために救われたのか、世の汚れから免れて、神のご性質、その栄光と徳にあずかるために救われたのだよ。その選びと召しを確かなものとするために励みなさいということでありました。悪い者に対処するには、その悪いことに自分の霊的な健康をしっかりと保つことが大事です。風邪の菌から守られるためには、その菌がどこから来るか、そうした研究をするよりも、手を洗う、うがいをする、生活管理をしっかりするなど、自分を健康にしておくことが、最も効果的な風邪予防です。それと同じように、霊的に健全であることこそ、その成長こそが、悪いものから守ります。

2章から、教会に忍び込む偽教師の存在をペテロは話し始めましたが、彼らに速やかな滅びが来るのだということを、聖書のいろいろな箇所から論証しました。罪を犯した天使、墮落した天使ども、ノアの時代の洪水、そしてソドムとゴモラです。そしてソドムの中にいたロトが、その正しい心がソドムの不法を見聞きして心を痛めていたことにも言及して、敬虔な者たちを誘惑から救い出すという約束も書きました。そこで10 節から、偽教師がどのような存在なのか、なぜ彼らが滅びに至るような存在なのかを、かなり厳しい表現で書いていきます。

### 1A 権威の侮り 10-12

10 汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み、権威を侮る者たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆不敵な、尊大な者たちで、栄誉ある人たちをそして、恐れるところがありません。

10 節から 12 節には、偽教師たちが権威を侮ることについて詳しく説明しています。汚れた情欲について、また肉に従って歩むことについて、前半部分で話しましたが、さらにまた詳しく話します。その中に、偽教師たちが「権威を侮る」という大きな問題があります。ユダの手紙には、別の言葉で次のように書いています。「彼らはぶつぶつ言う者、不平を鳴らす者で、自分の欲望のままに歩んでいます。その口は大きなことを言い、利益のために人をへつらって人をほめます。(16 節)」教

会の中に不満が出て来るでしょう。そして、時にそれは公然と教会の秩序や指導者に対して、非難し、陰口を叩き、分派を引き起こすこともあります。そうした肉の行ないを我々人間は、生来持っています。そして、こともあろうにその欲望を梃子にして、自分の地位を高めようとする者たちがいて、彼らが自分を教師だと自称します。

聖書は、権威に従うこと、服従することを教えています。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」ですから、すべての全権者であられる神がいます。そしてその神に寄り頼み、信頼し、従う人間がいます。そして、神が人に、他の人を治める権威も与えられました。ですから、神の民はへりくだって、従うことを教えました。それに反発するイスラエルの民は、それが肉の行ないであることを教えています(1コリント 10 章)。コラの反乱は、最も厳しい裁きを受けました。生きたまま陰府に投げ込まれたのです。

キリスト者の生活が、従い、服従することがその特徴になっています。主を恐れかしこんで、互いに服従しなさいとパウロは、エペソ 5 章で教えています。妻が夫にキリストに従うように従いなさい、子どもは両親に従いなさい、奴隷は主人に主に仕えるように仕えなさい、と教えました。それから、ペテロは第一の手紙で、王を敬い、総督にも従いなさいと教えました。そして教会の指導者に対して、ヘブル書の著者はこう教えました。「ヘブル 13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。」

しかし、権威を侮り、平然と上に立つ者をそしめる者たちがいるのですが、その高ぶりについてペテロは警告しています。聖書には終わりの日に、すべての神々よりも自分を高くする反キリストの存在が預言されています。「ダニエル 11:36-37 この王は、思いのままにふるまい、すべての神々よりも自分を高め、大いなるものとし、神の神に向かってあきれ果てるようなことを語り、憤りが終わるまで栄える。定められていることが、なされるからである。彼は、先祖の神々を心にかけて、女たちの慕うものも、どんな神々も心につかない。すべてにまさって自分を大きいものとするからだ。」「黙示 13:5-6 この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」

私たちは民主主義という思想の時代に生きています。民が主であるとする考えです。また人間が一番だとする時代に生きています。人権がとても大切にされています。けれども、それはすべて神からの賜物です。神の恵みがあって人権が尊ばれるべきであり、神が必要ならば人権のない状況もお許しになられる時もあるのです。しかし、人権や民主主義が神から独り歩きして、それを

偶像視しています。ヒューマニズムが、今日、最も警戒しなければいけない思想、考えでしょう。ゆえに、人間が一番だ、自分が一番だという欲望が制御されることなく、噴出している時代に生きています。テモテ第二 3 章にあるように、「自分を愛する時代」です。その世の流れを、キリスト教の装いをもって教会の中に持ってくる強い圧力があります。それを、人々に尤もらしく教えていく時に、まさにそれが偽の教えであります。

11 それに比べると、御使いたちは、勢いにも力にもまさっているにもかかわらず、主の御前に彼らをそしって訴えることはしません。

私たちが権利を持っていると言っても、たかが知れています、御使いは、イエス様の墓のところで、ちょっとした行動で大地震さえ起こすことができましたが、主権や力が与えられています。しかし、その御使いとて、神に反対する墮落した天使の勢力に対して、直接、ののしることをしなかったのです。それはユダの手紙に書かれています。「9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように。」と言いました。」権威に対して、神を恐れる恐れがあったのです。

12 ところがこの者どもは、捕えられ殺されるために自然に生まれついた、理性のない動物と同じで、自分が知りもしないことをそしるのです。それで動物が滅ぼされるように、彼らも滅ぼされてしまうのです。

ここで、「動物」について話しています。動物と人間の違いは、ペテロがここで言っているように「理性」です。事実や客観的情報に基づくのではなく、感情や感覚で物事を決めています。そして、その特徴は、「自分が知りもしないことをそしる」ことです。事実よりも、感じていることの方が大事なのです。そして、ペテロは彼らが滅ぶ定めにあることも話しています。これは、動物が人間とは異なり、霊を持っていないので、復活して主と共に生きるという希望はないということを表しており、人間に与えられている霊が活かされて、主にあって救われる希望はない、ただ倒れて死んでいってしまうということを話しています。

ここにおいても、今は、終わりの日の兆候が見えていると言えるでしょう。事実よりも、感情が大事にされる時代に生きているからです。感情が絶対なのです。自分の感じていることを害されることは悪であるとしている時代です。そのために、感情のコントロールが利かない人が増えています。これをある人は、「感情が神になっている」といいました。

「だから、われわれは自分の感情が神のように絶対正しいと考える傾向がある。教師や上司の指導にとりあえず従っているフリをしても、腹の中では自分の方が絶対に正しいと考えているようなときは、感情に支配されていると考えてまず間違いない。

自分の感情が絶対に正しいとする基準はどこにも存在しない。他人も自らの感情に基づいて、自分が絶対に正しいと考えている。人間が絶対に正しいと考えることは確実に存在する。ただし、それは複数存在するのだ。自分の感情に固執して周囲から孤立しないようにするためには、近現代人にとって感情が神の位置を占めていることをよく認識しておく必要がある。」<sup>1</sup>

## 2A 愛餐に持ち込む欲望 13-17

10 節から 12 節までは、「高慢」「高ぶり」の問題と言えます。世にある欲として、使徒ヨハネがどのようにまとめたことがあります。「1ヨハネ 2:15-16 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」この暮らし向きの自慢は、「生活における高ぶり」とも言い換えられます。ですから世にあるものは、高ぶりがあり、そして肉の欲があり、目の欲があります。13 節から 17 節に出て来る偽預言者の特徴は、この肉の欲や目の欲が出てきます。好色という欲望、そして金銭についての貪欲であります。

13 彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。彼らは昼のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。

彼らがどのようにだましごとをしているかといいますと、自分たちは「昼のうちから飲み騒ぐことを楽しみ」としてしています。それだけ自堕落な生活をしているのです。まだそれを教会の外でしているなら、罪を犯しているだけとなります。ところが、同じ神に対する姦淫の心をもって、教会における愛餐、聖徒たちの親しい交わりの中にその汚れた思いを持ち込んでいるのです。「あなたがたといっしょに宴席に連なる」と言っていますが、これはユダの手紙では、「愛餐」と呼んでいます。主の聖餐も含まれますし、礼拝の後のご飯、愛餐も含まれます。私たちは、食事の席において心をうちとけます。主は食事によって、パンを裂くことによって、そこに真実な交わり、一つになることを願っておられます。ラオデキヤの教会に対して、「あなたがたが悔い改めるなら、共に食事をする」と言われました。食事において、喧嘩することは難しいです。平和を象徴しています。

ところが、それがゆえに、そこを汚れた思いを持ち込むには、あまりにも容易いことなのです。人々が互いを信頼して、打ち解けています。そこに自分たちの隠れた動機を持ち込めばどうでしょうか？自分たちの世の宴席で楽しんでいるような形で、自分に仕える心で楽しんだらどうでしょうか？教会の愛餐の席において、実際は礼拝後の交わりではなく、教会とは分離した心で別の思いを抱きながら交わっている、分派を作っていることさえあります。

---

<sup>1</sup> <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=7171>

「しみや傷」とありますね。これは、いけにえのことを指しています。主が受け入れるいけにえは、しみや傷があってはいけません。けれども、彼らがいるために、しみや傷のようなものができて、キリストの体が神にとって悲しまれるものになってしまっているということです。しかし教会は、しみや傷がないものとして立たせられています。「1ペテロ 1:18-19 ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

14 その目は淫行に満ちており、罪に関しては飽くことを知らず、心の定まらない者たちを誘惑し、その心は欲に目がありません。彼らはのろいの子です。

ここでの「淫行に満ちており」は、文字通りでもあり、またもっと性的な分野だけではない欲望も含まれます。ここでの大事なことは、「心の定まらない者たち」のことです。主を信じて、救われたばかりであるとか、求道中であるとか、まだしっかりと主に立っていない者たちのことです。パウロは、テサロニケ人への手紙第一において、新しく信じた彼らが、誘惑者によって信仰から離れてしまってもやはいないか心配していましたが、「あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。(1テサロニケ 3:8)」とっています。まだしっかりと立っていない人を、こういった人々は嗅ぎつける臭覚みたいなものを持っています。そして、どんどん自分のほうに引き付けようとしていくのです。

性的なことについて言えば、教会の中で決して珍しいことではない事件があります。パウロがテモテ第二 3 章でこう話しています。「3:5-7 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。こういう人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。」彼らは、いかにも霊的に見えるように、祈ったり、また聖書を開いたりします。そして、新しく信じた人が、その人に引き付けられるのですが、結局、その人と情欲に陥るということです。なぜか、そうした男は、あるいは女の時もありますが、いつも異性の相手のところに近づくのです。交わりであれば、同じ男たちといっしょにいても、また同じ女性たちといっしょにいてもよいものです。ただ、ここは性的なことに限らず、隠れた動機をもって、心定まらない人たちを自分の罪の中に引きずり込むことを話しています。次に、金銭についての欲望について取り扱っています。

15 彼らは正しい道を捨ててさまよっています。不義の報酬を愛したベオルの子バラムの道に従ったのです。16 しかし、バラムは自分の罪をとがめられました。ものを言うことのないろばが、人間の声でものを言い、この預言者の気違いざたをはばんだのです。

バラムはどのようなことで、不義の報酬を愛したのでしょうか？民数記を読むと、彼は、イスラエ

ルをのろいたいバラク王によって雇われたことがわかります。はるばるユーフラテス河畔にいるバラムのところまで、死海のすぐそばのモアブから、使いがやって来ました。バラクは神からイスラエルをのろってはいけない、と命じられていたのに、使いが持ってきた大金を見て、それでその依頼を承諾したのです。バラムのろばが、人間の声でものを語ることによって、自分が行なっている気違いざたを知らされました。そしてバラムは、最後はバラクに助言をします。それは、イスラエルを呪うことができなければ、彼らが呪われることを行なえばよいと。それでモアブ人の女をイスラエルの宿営に連れて行かせたのです。それは、不義の報酬を愛したからでした。けれども彼の最後は、イスラエル人が後に攻め入って、そこにバラムがまだいたので、彼も殺しました。不義の報酬を愛しましたが、ものの見事に滅びました。

17 この人たちは、水のない泉、突風に吹き払われる霧です。彼らに用意されているものは、真っ暗なやみです。

イエス様からはいのちの水が湧き出ます。「ヨハネ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」けれども、偽教師のことばには、いのちもなにもなく、突風で吹き払われる霧のように、実体のないものです。

そして彼らの行き先は、「真っ暗なやみ」、つまり地獄です。地獄は福音書で、「外の暗やみ」と呼ばれています。鍾乳洞など洞窟に入って、そこで一度電灯が消されたことがあります。わずかに数秒の間でしたが、自分の目の前で手を振っても、何一つその動きを見ることはできませんでした。これこそ真っ暗闇なのですが、地獄はそのようなところです。

### **3A 滅びの奴隷 18-22**

こうして偽預言者が、権威をそしり、欲望をもって信者の交わりの中に入っていき、騙していくことを見ました。そして次に、「自由」について話します。キリスト者が神のご性質にあずかったのだから、敬虔にかなった教えを守るために、日々努力するということが、不自由で束縛していると教えます。宗教の束縛からの解放、これこそが恵みだと教えたら、いかにも尤もに聞こえないでしょうか？もちろん、律法主義という問題はいつも教会に入ってきます。しかし、実は彼らの教えているものは、自由ではなく放縦であり、律法主義と同じように彼らをごんじがらめにして束縛していき、ついには滅びに至らせると警告しています。

18 彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、誤った生き方をしている、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し、19 その人たちに自由を約束しながら、自分自身が滅びの奴隷なのです。人はだれかに征服されれば、その征服者の奴隷となったのです。

かつての初代教会にこのような異端があったのですが、現代にもあります。「愛の家族」そして「ファミリー」と呼ばれている団体がアメリカから始まりましたが、彼らは信者での間の性的交渉が霊的交わりの一貫として教えています。恐ろしいことです。そして、「その人たちに自由を約束しながら、自分自身が滅びの奴隷なのです」と言っていますが、その教師たち自身が救われなければいけない、失われた存在なのです。パリサイ人たちが行っていたことと似たようになっています。「マタイ 23:13 しかし、忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはらず、はいろいろとしている人々をもはらせないのです。」

そして、「人はだれかに征服されれば、その征服者の奴隷となったのです。」という教えは大事です。私たちが自由であるためには、拒み、立ち向かい、退けるという決然とした態度が必要です。にもかかわらず、それを頑なな態度、恵みではない、いろいろなそしりを行ない、けれども結局は、征服された奴隷となってしまうのです。肉欲のとりこになっているときに、自分は自由であると思います。確かに、神の権威からは自由になっているでしょう。しかし、肉欲の奴隷となっており、征服された奴隷であるのです。ローマ6章には、「あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。(16 節)」とあります。

20 主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりもっと悪いものとなります。

1章で、イエス・キリストを知ることによって、いのちと敬虔についての神の力が与えられたと書かれていましたが、再び世の汚れに戻ったならば、イエスを知った初めの時よりも、状態がもっと悪いものとなります。これは必ずしも、救いを失ったということではありません。既にキリスト者であるにも関わらず、征服されてしまうのであれば、もっと悲惨な状況になるということです。最も惨めな人とは、「世的なキリスト者」であるとしばしば言われます。教会に来れば、いつも罪を犯していることが示されて惨めな思いになる。だからといって悔い改めない。それで世を楽しもうとしても、神を知らない人たちのように楽しめない、ということです。ある人は、こうも言いました。戦場において、相手国の兵士の軍服でもなければ、味方の軍服でもないものを身につけて、それでどちらからも弾が飛んできたというものです。

21 義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったのです。22 彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る。」とか、「豚は身を洗って、またどろの中にくる。」とかいう、ことわざどおりです。

「知る」ということには責任がともないます。知らずに行なったことは、軽いむちで済むが、知って  
いて行なえば、その罰はひどいということを、主ご自身がお語りになったことがあります。そして自  
分の吐いた物、つまりもうすでに離れた肉欲や汚れの中に戻るということです。そしてきよめられ  
たのに、再び汚れの中に戻るということです。清められたのに、また汚れの中にはいるという惨め  
な状態です。

したがって私たちが、いつも「どこから救われたのか？」を思い出すべきです。「1:3-4 というの  
は、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエス  
の、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。その栄光  
と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約  
束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」世の  
欲のもたらす滅びから免れるために、救われました。そして神のご性質にあずかるために救われ  
ました。